MOON-4　夜叉　3

みづき海斗

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ＭＯＯＮ－４　夜叉　３

【Ｎコード】
Ｎ４９６５Ｍ

【作者名】
みづき海斗

【あらすじ】
秀をめぐって『闇』が動き出す。「私は秀が欲しいだけ。」少女桜のあどけない微笑みの陰には－－－

ＭＯＯＮシリーズ第４弾　『夜叉』３話目です。

桜ー2（前書き）

なんか締切前の漫画家さんみたい（_¥）。。。

桜ー2

「裕希、パス！」
友人の惇が、放課後の体育館で裕希に声をかけた。チーム同士の練習試合だった。
「ＯＫ！」
裕希はドリブルで３人抜くと、惇へロング・パスを送った。そして、『円陣』から抜け出し、ゴール前の隙間へと潜り込む。
惇からのパスはそれを見計らった様に、再び裕希の元へと戻った。

バンッ

軽くジャンプし、ゴールへと茶色いボールを投げ込む。

ピーッ！

そこでホイッスルが鳴った。
裕希のチームは５点差で勝利した。
「じゃ、ごめんーーー俺バイトだから、後は明日の早朝練習で取り返すよ。」
軽く肩で息をしながら、近づいてきた部長の惇にそう告げた。
「いいけどーーー何だってバイトなんか。」
コートから出た所で、惇は裕希に声をかけた。
裕希は惇と並び、
「一人生活だからね。働かなくちゃ、いつまでも父さんに甘えてられないよ。」
にっこりと笑う。
もちろん、和人たちの事は秘密である。
「でも、裕希。」

「ん？何。」
「一人暮らしになってお前随分変わったな。」
白いシューズの紐を外しながら、タンクトップ姿の裕希が、
「そう？俺、全然だけど。」
「何か、すごく大人びた感じ。」
「そうかな？」
裕希はにっこりと笑った。
今の裕希には今までの心の中の『孤独』はない。あの夜、和人と出会ってから――

『俺も買おうとしてたトコ。』

和人の姿を思い浮かべる。
『そうなりたい』という、一人でも強くなりたい、という思いが今の裕希にはあった。
しかし、それは『過去』を捨てるものではない。『新しい何か』を手に入れるために色々と試行錯誤している最中だった。
だから、部活も学校も和人が言う通り通っている。
「もうすぐ、試験あるしね。」
惇は言った。
「それが問題・・・　・・・」
裕希は頭を抱えた。「応用物理が弱いんだよね、俺。」
「学校はやっぱ国立志望？」
「一応ね。でも」
そこで、隣に座り込んだ惇に視線を向け、
「そこで経営学を専攻するかどうかは、判らない。俺、今やりたい事探してる最中だから。」
「そう。」
そして、視線をチームが変わった試合へと目を向けた。
確かに、裕希は試行錯誤の最中だった。

自分が本当にやりたいのは何か———
そんな思いもあって、『篠原』の名前を今は消している。
「俺も何か探さなきゃねー。」
惇も同じ思いだった。

放課後のバスケ部の練習とバイト。
裕希も彼なりの生活リズムがもう出来ていて、帰りの電車の中では仮眠、帰ってからはバイト、夜は和人や秀に勉強の補足をしてもらっている。
「ただいま、和人！朝子さん！」
裕希は1日のスケジュールも電車の中で考え、
「バイト、行ってくる———でさ、和人。」
カウンター・キッチンでコーヒー片手に朝子と談笑していた彼に声をかける。
「期末試験なんだけど、応用物理が俺、ちょっと弱いから夜、教えてくれる？」
「いいよ。」
青いワイシャツ姿の和人が答える。「あんま無理すんなよ。成績落ちたら即『退去』だからな、バイトも。」
「そう言うと思った。」
裕希は和人の隣に腰かけ、朝子が入れたアイス・キリマンを一気に飲み干した。
「『約束』だもんね、あの夜からの。」
傍らの和人がくすくすと笑う。
「和人は口だけだから、安心していいわよ、裕希くん。」
彼女も自分のカップで、キリマンを飲んでいた。
「でも、『けじめ』は必要だよ。いつまでも和人たちに甘えてちゃいけないし———今のバイト先だって和人が紹介してくれた所だもん。」
と、言い、時計を見ると夕方４：３０．

「じゃ、バイト行ってくるよ。」
裕希は2人に元気に言った。「ねぇ、和人。今日からＰＭ１０：００までのシフトなんだけどいい？」
「俺は“秀の言いつけ通り”ここにいるから大丈夫だよ。何かあったら携帯ですぐ呼ぶんだよ。秀にも連絡しとく。」
九桜の『復活』を予感させるこの街の『夜』は最近、異様な気配を見せている。
それだけが、少し気がかりだった。
「ありがとう！」
裕希は笑った。
「大丈夫？裕希くん。明日の朝はまたバスケ部の試合なんでしょ？」
「平気平気。俺電車の中で寝るの得意だし、バイトも期末試験まで週3日にしてもらってるし。」
それから制服の上着だけを脱ぎ、「じゃ、行ってくるね。」
「お夕食は？裕希くん、何か食べていかなくていいの？」
「向こう（ＭＡＣ）で食べるよ。」
と、笑顔で答え玄関へと向かう裕希。
ふと、思いついた様に、
「化学、秀さんに教えてもらおう！」
そして和人に、「ビック・マック3ケ買って来るからそう秀さんに伝えといてくれる？和人。」
「了解。」
和人はくすくすと笑った。「お前も秀の『使い方』をマスターした様だな。じゃ、帰りか仕事の途中にお前の所寄る様に伝えとくよ――その方が『安全』だ。」
「ありがとう！じゃ、行ってくるね、和人、朝子さん！」

バタン・・・　・・・・

閉じられた白い扉。
それを眺め、
「裕希くんも随分と変わったわね。」
と、朝子は言う。「始めの頃は本当、捨てられた子犬みたいな感じだったのに。」
「ああ———ここへ来てからもう2年近くになるからな。」
「和人も」
と、朝子。「秀との仕事———『昼の住人』としての生活が楽しくて仕方ないんじゃない？」
「俺はあいつにこきつかわれてるだけ。」
和人はキリマンを一口、口に含んだ。
そこへ、

るるる　るるる

ソファの前のガラス張りのテーブルに置いた和人の携帯が鳴った。
「丁度、ＴＥＬしようとしてたトコ。」
携帯を取るとソファに座り、和人は、
「裕希が今日のシフト夜１０：００だから途中様子見て来てくれない———そう、今出たトコ。」
『了解、ダンナ』
携帯の秀の声はいつもと変わらない。
『だけど、ダンナはもう少し大人しくしといてくれよ、『昼』も『夜』も。』
「その理由を聞いてるんだよ、秀。」
『ないしょ。』
そこで携帯は切れた。
「・・・　・・・ったく、あいつは。」
彼は黒い携帯を見つめ、呆れ顔で呟いた。
少女は———浅い眠りから覚めた。

そこは都内、しかし場所は解らないがかなり古い洋館の一部屋であった。
「榊。」
少女　桜は黒い髪をかき上げ、「ずっと夢を見ていたわ。」
ベッドの傍らでずっと彼女の『眠り』を見守っていた青年に向かい、
「あの人が来たの。」
青年は黒曜石の瞳で、彼女のあどけない笑顔を満足気にじっと見つめ、
「そう。だから『安らか』だったんだ。」
「ええ。」
洋館の2階にある寝室での奇妙な会話。
「榊は特別よ、心配しないで。でも、私、やっぱり秀が欲しいの。」
「また、お嬢の気紛れが始まった。」
桜は少し目を細め、『榊』という長身の青年に向かい、
「気紛れじゃないわよ。」
そしてあどけなく微笑む。「秀は私の物よ―――初めて会った時から。
そんな秀を奪ったのは和人の方よ。」
そこで、冷たい微笑に変わる。
金色とビリジアン・ブルーを混ぜた様な煌めきを放つ瞳。
そのあどけない微笑みとは正反対のもの。
「だから、和人なんか嫌い。いらないわ。」
身を起こし、ベッドの片隅に細い脚を落とす。
「ねぇ、榊。私お腹空いちゃった。」
彼女は青年　榊におねだりをした。
「血をちょうだい、榊。」
「いいよ。」
闇色の微笑を持つ榊は、すっ・・・　・・・と黒いシャツの袖を

めくり左手を差し出した。

再び――洋館に沈黙が訪れた。

桜ー2（後書き）

今日は新しい冷蔵庫が届きます。・・・・　・・・・ってか『夜叉』第2部まだ5Pしか書いてない（プロットは出来てるけど（滝汗））。。。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n4965m/

ＭＯＯＮ-４　夜叉　３

2010年10月15日23時25分発行